

ヨーロッパ諸国における剣道実践者の継続要因に関する検討 -特に、フランス、スイス、ハンガリーを対象として-

Case studies of endurance factor in Kendo players at the European countries

太田 昌孝*, 杉山 重利*, 福ヶ迫 善彦**

Masataka OOTA*, Shigetoshi SUGIYAMA* and Yoshihiko FUKUGASAKO**

推薦評議員：小山 泰文

I. はじめに

我が国の伝統的な運動文化である柔道は、国際的な普及を遂げており、国際大会、オリンピック等において、各国の代表選手がその競技力を競っている。特にフランスにおいては、競技人口が1996年に55万人を超え、国内の普及・発展を考えると、フランスにおいて柔道はメジャースポーツとして確かな地位を得ているといえる（関根清文・永田千恵、1997）。また、2004年アテネオリンピックにおける柔道競技では、ヨーロッパ勢が活躍し、我が国の運動文化が世界のスポーツとして広がりを見せているといえよう。

他方、我が国の伝統的な運動文化の一つである剣道は、世界剣道大会（World Kendo Championships）、ヨーロッパ剣道大会（European Kendo Championships）が行われているものの、世界の競技人口を考えると、いまだ十分に普及しているとはいえない。しかしながら、近年のヨーロッパ諸国においては剣道連盟が設立され、我が国の剣道実践者との国際交流が頻繁に行われている。例えば、ハンガリーでは、1985年、ハンガリー剣道

連盟を発足し、1989年、ヨーロッパ剣道連盟に加盟し、1991年、国際剣道連盟に加盟した。連盟の活動目的は、ハンガリー共和国の法規に基づき、国内における剣道連盟の活動を統括し、その運営と管理を行うとともに、国際的な活動への参加について会員を代表するものである。また、国際的な交流として、1986年から我が国をはじめフランスなどの諸外国から使節団を受け入れている。ただし、2003年度までの会員数はいまだ約550名である。また、柔道の競技人口が55万人を超えるフランスでは、剣道連盟登録数が約4000名、その内有望者は約900名である。このようなことから、我が国の伝統的な運動文化である剣道が、世界の武道として普及する可能性を秘めているものの、今後の普及方策に大きな関心が寄せられる。つまり、柔道は、極端な喜びの表現、カラー柔道着、細分化された階級制や技のポイント制等を許容することで、これまで築かれてきた運動文化と異なる形で普及した。一方、剣道は今後どのような形で広められるのかに研究の焦点が当てられる。浅見（1995）は、我が国の剣道を実践していた高校生及び大学生が剣道をやめた理由として、剣道に

* 国士館大学体育学部（Faculty of Physical Education, Kokushikan University）

** 国士館大学大学院スポーツ・システム研究科（Graduate School of Sport System, Kokushikan University）

古風な風潮や心身の向上に対する効果があることを認めているものの、そのことと自らは剣道をスポーツとして捉えていることの間はずれが生じたことを挙げている。

そこで、剣道が世界各国において普及することを検討するうえで、まず現在ヨーロッパ諸国で活動している剣道実践者の現状を知る必要があるだろう。つまり、剣道実践者の現状や「なぜ剣道を行っているのか」という継続要因を知ることによって、ヨーロッパ諸国をはじめとする諸外国における今後の剣道の指導法、剣道の普及方法の示唆を得ることができると考えたからである。

以上のことを踏まえ、本研究は、ヨーロッパ諸国における剣道実践者の現状と継続要因を明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1. 期日・対象

調査は、2004年2月中旬から6月下旬にかけて実施した。被調査者は、フランス、スイス、ハンガリーに母体をおく剣道のクラブ（10クラブ）に所属する335名で、その内訳は表1に示したとおりである。なお、有効回答は、332通（99.1%）であった。

2. 調査票の作成

調査票は、性別、年齢、剣道を始めた年齢、継

続年数といった被調査者の属性のほか、「あなたはなぜ剣道を行っているのか」という継続動機についても質問した。調査項目の選定は、右近（2003）、小山ら（2003）の調査項目を参考に行った。その後、剣道の専門家間で項目内容を検討し決定した。なお、「非常にあてはまる」、「ややあてはまる」、「どちらともいえない」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」、「わからない」という6段階の選択肢を設定し、簡便法に基づいて得点化した。また、逆転項目は存在しない。さらに、「総合的な継続性」として「今後も剣道が続けたいと思いますか」という設問を設定した。フランス語訳にあたっては、フランスに長期滞在経験のある剣道の専門家に依頼した。

3. 統計処理

本研究における統計解析の手続きは、SPSS 11.0J for Windowsにより、統計学的有意水準を5%未満とし、有意性を判断した。

表1 調査対象と回収率

国名	男	女	回答数 (人)	有効 (%)
	(人)	(人)		
フランス	155	29	187	98.4
スイス	29	12	41	100
ハンガリー	84	23	107	100
合計	268	64	335	99.1

表2 被調査者の年齢と剣道を始めた年齢のクロス集計

		剣道を始めた年齢						合計
		1~4歳	5~9歳	10~14歳	15~19歳	20~24歳	25~29歳	
現在の年齢	5~9歳	0	6	0	0	0	0	6
	10~14歳	2	19	19	0	0	0	40
	15~19歳	0	16	13	23	0	0	52
	20~24歳	0	5	4	13	23	0	45
	25~29歳	0	1	0	4	13	26	44
	30~歳	0	1	6	7	13	23	95
合計		2	48	42	47	49	49	95

(単位:人)

Ⅲ. 結果と考察

1. 被調査者の属性

表2は、被調査者の年齢と剣道を始めた年齢のクロス集計結果である。表2から、本調査の被調査者が各年代を概ね対象としていたことがうかがえる。また、「現在の年齢」と「剣道を初めた年齢」との関係を見ると、被調査者の多くが剣道を始めて数年しか経過していないことがわかる。このことから、ヨーロッパ諸国における剣道は、近年に普及され始めたばかりであるといえる。

2. 剣道実践者の継続動機

剣道実践者における継続動機の項目について、分散分析・多重比較（Bonferroniの多重比較）を行ったところ、有意水準0.1%未満で有意な差がみられた（ $F=39.711$ 、 $P<0.001$ ）。特に、「5. 新しい経験をしてみたいから」「7. 健康のためによいから」は、他の項目に対して有意な高い割合を示した。これは、剣道に対して、オリエンタルなイメージを持っているためと考えられる。つまり、近代スポーツにはない感覚や体験を求めているといえる。また、剣道に対して、健康により運動と

表3 継続動機の集計結果

項目	選択肢						
	非常に あてはまる	やや あてはまる	ど ちらとも いえ ない	あ まりあ てはま らない	ま ったく あては まらな い	わ から ない	無 回 答
1 剣道家になりたいから	23.2	24.7	13.6	10.5	22.6	2.7	2.7
2 向上心を高めたいから	43.4	15.7	11.7	6.9	17.5	3.3	1.5
3 試合に出たいから	34.6	18.7	23.2	9.6	10.8	1.5	1.5
4 友だちができるから	28.3	26.2	20.5	5.1	13.9	3.3	2.7
5 新しい経験をしてみたいから	61.1	21.4	5.4	2.1	6.3	1.8	1.8
6 チャンピオンになりたいから	13.6	14.5	15.1	18.7	32.3	3.3	2.7
7 健康のためによいから	65.1	19.9	6.9	3.0	3.6	0.9	0.6
8 防具がかっこいいから	24.4	22.0	22.0	9.6	14.8	5.4	1.8
9 格闘技にあこがれているから	50.0	18.1	9.3	14.2	6.6	1.2	0.6
10 友だちと一緒に過ごしたいから	17.5	18.1	18.1	9.9	30.4	3.9	2.1
11 体力をつけたいから	33.7	21.4	13.3	9.6	17.5	3.0	1.5
12 休日を楽しく過ごしたいから	44.0	24.4	12.0	5.7	8.7	3.3	1.8
13 勝つ楽しさを味わいたいから	22.6	16.9	21.7	14.5	20.2	2.4	1.8
14 礼儀正しい態度を身につけたいから	41.9	21.7	10.8	4.2	15.7	4.5	1.2
15 好きな剣道家がいるから	33.4	21.1	9.6	12.3	16.0	6.0	1.5

(単位:%)

して捉えていることから、ドーピング、過度のトレーニング、そして優勝劣敗といった近代スポーツに対するアンチテーゼともいえる。

一方、「6. チャンピオンになりたいから」「10. 友だちと一緒に過ごしたいから」は、他の項目に対して有意な低い割合を示した。これは、一見対極な関係にあると思われるが、競技スポーツとして剣道を行っている群と仲間と集う場として行っている群が存在することを示している。

3. 継続動機の因子構造

ヨーロッパ諸国における剣道実践者の継続要因を明らかにするために、継続動機について因子分

析を行った。因子数を固有値1.000以上で規定した主因子法・プロマックス回転（斜向回転）によって行った結果、4因子が抽出された（表4）。これらの因子の解釈及び命名については、原則として因子負荷量が0.400以上の項目に着目して検討した。なお、「2. 向上心を高めたいから」「8. 防具がかっこいいから」「9. 格闘技にあこがれているから」「12. 休日を楽しく過ごしたいから」は、すべての因子に対して因子負荷量が0.400未満であったため、構成概念とあまり関係がないと判断した。

第1因子は、「4. 友だちができるから」「5.

表4 剣道実践者における継続動機の因子構造

項目	質問項目	因子	I	II	III	IV	共通性
4	友だちができるから		0.866	-0.116	0.109	-0.063	0.517
5	新しい経験を試してみたいから		0.618	-0.013	-0.007	-0.016	0.324
10	友だちと一緒に過ごしたいから		0.553	0.168	0.012	0.039	0.442
7	健康のためによいから		0.489	0.147	-0.028	0.029	0.326
13	勝つ楽しさを味わいたいから		-0.090	0.817	-0.145	0.151	0.467
6	チャンピオンになりたいから		-0.092	0.722	0.292	-0.086	0.537
3	試合に出たいから		0.159	0.594	0.127	-0.197	0.406
11	体力をつけたいから		0.167	0.531	-0.103	0.104	0.379
1	剣道家になりたいから		-0.116	0.126	0.638	-0.009	0.313
15	好きな剣道家がいるから		0.038	-0.079	0.428	0.225	0.260
14	礼儀正しい態度を身につけたいから		-0.006	-0.057	0.196	0.801	0.423
2	向上心を高めたいから		0.137	0.104	0.305	0.317	0.458
8	防具がかっこいいから		0.234	-0.042	0.342	0.048	0.235
9	格闘技にあこがれているから		0.101	0.216	0.025	-0.031	0.118
12	休日を楽しく過ごしたいから		0.346	0.144	-0.225	0.213	0.240
	固有値		5.058	1.392	1.201	1.024	
	因子寄与率		33.723	9.280	8.006	6.830	
	累積寄与率		33.723	43.003	51.009	57.839	
因子間相関行列							
	第I因子	1.000					
	第II因子	0.515	1.000				
	第III因子	0.461	0.507	1.000			
	第IV因子	0.573	0.459	0.356	1.000		

新しい経験をしてみたいから」「7. 健康のためによいから」「10. 友だちと一緒に過ごしたいから」の4項目で構成された。そこで、この因子を「余暇活動」と命名した。

第2因子は、「3. 試合に出たいから」「6. チャンピオンになりたいから」「11. 体力をつけたいから」「13. 勝つ楽しさを味わいたいから」の4項目で構成された。そこで、この因子を「競技志向」と命名した。

第3因子は、「1. 剣道家になりたいから」「15. 好きな剣道家がいるから」の2項目で構成された。そこで、この因子を「剣道家への憧れ」と命名した。

第4因子は、「14. 礼儀正しい態度を身につけたいから」の1項目のみで構成された。そこで、この因子を「社会的態度の成長」と命名した。

以上のことから、ヨーロッパ諸国における剣道実践者の継続要因は「余暇活動」「競技志向」「剣道家への憧れ」「社会的態度の成長」の4つから構成されるといえる。

また、各因子間の相関係数を検討してみたところ、すべての因子間において中程度の相関係数が認められた。つまり、すべての因子を満足させることが継続動機の高まりを生み出すといえる。

4. 継続動機と「総合的な継続性」との関係

継続動機15項目と「総合的な継続性」との関係を見た。その結果、「1. 剣道家になりたいから」($r=0.148$)「2. 向上心を高めたいから」($r=0.127$)「15. 好きな剣道家がいるから」($r=0.121$)と相関係数は決して高くないものの、「総合的な継続性」との間で有意水準5%未満の有意な正の相関関係を示した。このことから、「今後も剣道を続けたい」という「総合的な継続性」には、「憧れ」や「精神的な成長」が影響を及ぼすといえる。つまり、剣道を教える指導者が技術的・人格的に優れている必要があり、そのような指導者に指導されることによってさらに剣道を続けようという継続性に影響を及ぼすといえる。

IV. まとめ

本研究は、ヨーロッパ諸国における剣道実践者の継続要因を明らかにすることを目的とし、フランス、スイス、ハンガリーに母体をおく剣道のクラブに所属する335名を対象に分析を行った。その結果、剣道実践者の継続要因は「余暇活動」「競技志向」「剣道家への憧れ」「社会的態度の成長」の4つから構成されていることが明らかになった。また、各因子間の相関係数を検討してみたところ、すべての因子間において中程度の相関係数が認められ、この4つの継続要因を満足させることが継続動機の高まりを生み出すといえる。さらに、継続動機と「総合的な継続性」との関係から、剣道を教える指導者が技術的・人格的に優れている必要があり、そのような指導者に指導されることによってさらに剣道を続けようという継続性に影響を及ぼすことが明らかになった。

以上のことから、ヨーロッパ諸国をはじめとする諸外国で剣道を普及させる際、①指導者の育成、②多彩な継続動機を満足させる指導カリキュラムの作成等が必要とされ、今後、剣道の普及活動に携わる剣道家の課題となるだろう。

引用・参考文献

- 浅見裕 (1995) 現代青年の剣道観についての研究. 武道学研究27 (2): 8-17
- FFJDA (1998) METHODE FRANCAISE DEN SEIGNEMENT DU JUDO-JUJITSU APPROCHE PEDAGOGIQUE DES 6-9 ANS. A.P.B.: Paris
- 小山泰文・杉山重利・斉藤仁 (2003) フランスにおける柔道の普及振興策—特に、初心者指導を中心に—. 体育研究所報22: 71-77
- 関根清文・永田千恵 (1997) “世界一”の柔道人気国!. 近代柔道19 (12): 15-19
- 右近清洋 (2003) 少年期におけるサッカー継続に関する研究—サッカークラブへの参加動機および活動意欲に着目して—. 国士舘大学大学院スポーツ・システム研究科修士論文
- 内田治 (2002) すぐわかるSPSSによるアンケートの調査・集計・解析 [第2版]. 東京書房: 東京.